

形容詞の主観性について

ー対象内容による形容詞の分類とその位置づけー

細川 英雄

【キーワード】形容詞 主観性 感覚・感情 属性 評価性

要 旨

本稿は、現代日本語における形容詞の分類を通して、その意味・用法について記述される「主観性」の問題について検討・整理し、その位置づけを試みたものである。

形容詞を客観的な性質・状態を表すものと主観的な感覚・感情を表すものとに分類しようとする考え方が一般的にある。一方で、情意・状態（情態）という規定もあり、また、感情・属性という定義もある。また、これらの記述や分類に対して、形容詞全体が主観的なのではないかという指摘や感情表現に関する分類・規定の中での主観性についての記述も見られる。

こうした分類・定義上の議論は、形容詞の性格をどのように考えるかという問題と不可分のように思われる。本稿では、現代日本語における形容詞について、①「わたし」の心の様子を表すか否か ② 対象内容に何をとるか、の2点から、その意味・用法を検討・整理し、得られた5種4類の形容詞分類試案を手がかりに、状態表現（サマ）としての形容詞を主観的な表現として解釈すべきことを論ずる。

1. 形容詞の主観性と対象語との関係
2. 対象内容による形容詞の分類と性格
3. 形容詞の主観性をどう位置づけるか

1. 形容詞の主観性と対象語との関係

いわゆる形容詞に、客観的な性質・状態を表すものと主観的な感覚・感情を表

すものにと分類しようとする考え方は、たとえば、『国語学辞典』（東京堂出版 1955）に「客観的な性質・状態の表現をなすものと、主観的な感覚・感情を表わすものとの別が認められ」（「形容詞」の項）とあるように、現在一般的である。

一方で、こうした主観・客観という分類に対し、情意・状態（情態）という規定や感情・属性という定義もあり、あるいはまた、形容詞全体が主観的なのではないかという指摘が森田良行(1968)にあり、このことは、寺村秀夫(1982)の感情表現に関する分類・規定の中でもふれられている。

こうした分類・定義上の議論は、形容詞全体をどのように分類するかという問題と不可分のように思われる。

形容詞の分類において、まず、その語が話し手自身の心の状態を表現するものか否かという視点が有効な分類指標になり得ることは、すでに西尾寅弥(1972)の詳細な調査が示すとおりである。それは、「わたしは悲しい」とは言えても、「かれは悲しい」とは言えないという言語事実からもきわめて重要な判断の一つであると考えられる⁽¹⁾。

さらに、対象語の存在が形容詞の分類に有効なことが、西尾(1972)の調査で指摘されている。この対象語については、時枝誠記(1950)が主観・客観二分類の立場から「この二つの語の意味の類別は、文法上、無用のことのやうであるが、主観的な事実を表現する語には、必ずそのような感情、情緒の主体が予想される」

(P.51)とし、次のように述べている。「その語が、主観的な事実をより多く表現してゐるか、客観的な事実をより多く表現してゐるかによって、主語の想定を必要としない場合、すなわち対象語を主語と考えてよい場合と、対象語を想定する必要のない場合とがあることを注意する必要がある」(P.53-54) また、その文法的性格については、北原保雄(1981, P.533)が、「花が赤い」と「私は昔がなつかしい」の文を引いて、それぞれ主格と対象語格に区別して考えるべきことを記述している。

こうした形容詞分類と対象語との関係については、細川(1989・1992)でも考えたことがあるが、その段階では単に対象内容による分類にとどまり、形容詞全体を見渡すような規定には至らなかった。そこで、本稿では、細川(1989)で分析対象とした現代語形容詞501語を対象内容との関係からあらためて修正分類し、その分類が主観性との関係でどのように位置づけられるかを明らかにすることを試みる。

2. 対象内容による形容詞の分類と性格

2-1 調査の方法と考え方

調査語彙と調査指標を次のように定め、得られた結果が次の表1である。

<調査語彙>

細川(1989)で分析対象とした現代語形容詞501語⁽²⁾

<調査指標>

- ① 「わたしは～い。」の形で、「わたし」の心の様子を表すことが可能か。
- ② 対象内容としてモノ・コトのいずれをとるか。

表1 調査結果と分類名称

型	指標		語構成			計	分類名称
	①	②	単純	派生	複合		
A	○	⌀	12	4	11	27	感覚形容詞 1
		コト	10	19	15	44	感情形容詞
		モノ	1	0	0	1	
		モノ・コト	8	20	14	42	
B	×	コト	2	37	0	39	評価性形容詞
		モノ・コト	49	69	91	209	属性形容詞
		モノ	49	25	29	103	
			17	5	14	36	
計			148	179	174	501	

まず、調査指標①により、「わたしは～い。」の形で「わたし」の心の様子を表すことが可能な語群を、かりにAグループとし、そうでない語群をBグループとする。表中の○は可能、×は不可能を示す。

次に、調査指標②により、それぞれの語が対象内容としてモノ・コトのいずれをとるかを内省によりテストし分類した。対象内容とは、Aグループの場合は、対象語によって示される内容であり、Bグループの場合は、いわゆる主語によって示される内容である。なお、モノ・コトのほか、ヒトを挙げる場合も考えられるが、この段階では保留した。これについては、後述する。また、この調査指標②での⌀は対象を必要としない場合を、モノ・コトはモノとコトの両方とることができる場合を示している。Bグループにおいて⌀が存在しないのは、Bグループの語が「わたし」の心の様子以外のもの、すなわち事物や事柄の様子を表すからである。つまり、事物・事柄の様子は主語として表されるため、文としては常に何らかの主語を必要とする。

*

このような手順によって分類した結果、表1に示すように、形容詞全体を「感覚形容詞」2種のほか、「感情形容詞」「属性形容詞」「評価性形容詞」各1種、計5種4類に分けることができた。以下、それらについて述べる。

2-2 感覚形容詞の2種について

「感覚形容詞」として名づけた語群は、次の通りである。

◇「わたし」の心の様子を表し、対象語を必要としないもの…「感覚形容詞 1」
 :単:アツカイ・アツカイ(暖),アツイ(暑イ),イタイ(痛イ),カユイ・カイイ(痒イ),クムイ(煙イ),サムイ(寒イ),ダルイ(怠イ),ネムイ(眠イ),クルシイ(苦シイ),ススシイ(涼シイ),ヒメジイ,マブシイ(眩イ)
 :派:クサツツイ(擦ツツイ),クムタイ(煙タイ),コソハコイ,ネムタイ(眠タイ)
 :複:スミクイ(住ミ難イ),スミヨイ(住ミヨイ),ハササミイ(肌寒イ),ヒタリイ(饑イ),ムシアツイ(蒸シ暑イ),ムスカコイ(ムス痒イ),モノウイ(物憂イ),アツカルシイ(暑苦シイ),イキグルシイ(息苦シイ),ネグルシイ(寝苦シイ),ムナグルシイ(胸苦シイ)

◇「わたし」の心の様子を表さず、主語にモノをとるもの…「感覚形容詞 2」
 :単:アツカイ・アツカイ(温),アツイ(熱イ),アマイ(甘イ),クワイ(甘イ・旨イ),イクイ,エゴイ,カライ(辛イ),キツイ,クワイ(臭イ),シブイ(渋イ),ツメタイ(冷タイ),ニガイ(苦イ),ヌクイ(温イ),ヌルイ(温イ),マズイ(不味イ),ユルイ(緩イ),オイシイ(美味シイ)
 :派:アマツルイ(甘ツルイ),イカラッホイ,エカラッホイ(割辛ッホイ),ショッホイ(塩ッホイ),スッホイ(酸ッホイ)
 :複:アヲクシイ(青臭イ),アマツッホイ(甘酸ッホイ),カビクシイ(黴臭イ),コガクシイ(焦ク臭イ),シガライ(塩辛イ),チクシイ(乳臭イ),ツチクシイ(土臭イ),ドロクシイ(泥臭イ),ナマツカイ(生温カイ),ナマクシイ(生臭イ),ナマルイ(生温イ),ヘンジョクシイ(便所臭イ),和ニカイ(和苦イ),セマクルシイ(狭苦シイ)

感覚形容詞に、臓器感覚としての体感・温度感覚などを表すものと、皮膚感覚としての味覚・触覚・嗅覚などの2種が存在することは、細川(1985・1989)でも指摘した。文法的な面においても、たとえば、

わたしは肩が寒い。

* あの人(は)は肩が寒い。

わたしは肩が冷たい。

あの人(は)は肩が冷たい。

のような文で、「あの人(は)は肩が寒い」と言えないのに対し、「あの人(は)は肩が冷た

い」と言えるのは、「寒い」と「冷たい」の文法的なありようの違いを示すものである⁽³⁾。「寒い」の場合は、「肩」が対象語として機能しているのに対し、「冷たい」の場合は「肩」を主語として扱うことになる。ここでは、こうした臓器感覚によるものを「感覚形容詞 1」とし、皮膚感覚によるものを「感覚形容詞 2」とした。

「感覚形容詞 1」には、眠気や体感また温度感覚の語が挙げられる。

○ さあさ、早く、寝んね寝んね。おばあちゃんも眠いよ。[佐多稲子・くれな
い]

のように、原則として対象語をとらないが、感覚主自身の身体部位が対象語となることはしばしば見られる。細川(1989)では対象内容として「かた」を立てた項目である。

○ 久しぶりにスキーをやったんで、あの次の日は腰が痛くてね、一日寝たよ。
[石川達三・幸福の限界]

「感覚形容詞 2」は、事物の状態を表し、その事物(モノ)を主語としてとるため、形としては、後に述べる「属性形容詞」と類似した性格を持つものである。しかし、単にその事物の形状や色彩などを表すのとは違い、あくまでも話し手の感覚にゆだねられている表現であるところから、話し手の感覚を通した事物(モノ)の表現と規定することができ、この点で「属性形容詞」とも一線が画されるだろう。また、従来、「感覚形容詞 1」と同様に「感覚形容詞」として一括される場合もあったが、本稿では前述の文法的な機能および調査の結果から両者は分けて考えるべきものと判断する。

この2種の最も大きな違いは、「感覚形容詞 1」が身体感覚を「わたし」の状態として表現しているのに対し、「感覚形容詞 2」が感覚を通した事物(モノ)の状態の表現としてある点である。それが主語・対象語という文法的な機能としても現れていると解釈すべきだろう。

2-3 感情形容詞と属性形容詞

ここでは、次のような語群を「感情形容詞」と呼ぶ。

◇「わたし」の心の様子を表し、対象語にコトをとるもの…感情形容詞

: 単: サイ(辛イ), ウシイ(嬉シイ), オシイ(滑稽*), カシイ(悲シイ), ケシイ(悔シイ), サビシイ・サミシイ(寂・淋), タシイ(楽シイ), ニキイ(憎イ), ムシイ(空シイ), ワビシイ(侘シイ)

: 派: アリガタイ(有難イ), イニクイ(言難イ), シメントウクシイ(七面倒臭イ), シラクシイ(洒落臭イ), シレツタイ(焦ツタイ), セツタイ(切ナイ), ケガタイ(耐エ難イ), テレクシイ(照レ臭イ), バカシイ(馬鹿臭イ), マダル

ッコイ(間意ッコイ), クハシイ(狂ハシイ), ナマシイ(悩マシイ), ハス^ハカシイ(恥シイ), ハラタ^タツシイ(腹立ツシイ), ハ^ハカシイ(馬鹿馬鹿シイ), ハ^ハカラシイ(馬鹿ヲシイ), モト^トカシイ, ヤマシイ(疾シイ), ヲカシイ(床シイ・懷シイ)
 :複:ウシロ^ロガ^ガライ(後ロ暗イ), ウシロ^ロタイ(後ロタイ), オレ^レオ^オイ(恐レ多イ), キツ^ツヨ^ヨイ(氣強イ), キマ^マシイ(氣マツイ), ココ^コヨ^ヨイ(心地良イ), ココ^コホ^ホシイ(心細イ), コロ^ロヨ^ヨイ(快イ), キク^クル^ルシイ(聞キ苦シイ), キ^キマ^マシイ(氣忙シイ), キス^スカシイ(氣恥ス^スカシイ), ケチ^チシイ(口惜シイ), コロ^ロク^クル^ルシイ(心苦シイ), ノリ^リオ^オシイ(残り惜シイ), マト^トオ^オシイ(待ち遠シイ)

◇「わたし」の心の様子を表し、対象語にモノをとるもの…感情形容詞
 :単:ホシイ(欲シイ)

以上のようなコトを対象語としてとる語群およびモノを対象語としてとる1語を、「わたし」の状態に即して心情を表しているため、ここでは「感情形容詞」と呼ぶが、これも一様ではない。

たとえば、

○ 好きなものを棄てるのは、つらいことなのよ。[武田泰淳・快樂]
 はコトをとる例であるが、

○ そんなに平四郎さんが憎いんですか。…。[室生犀星・杏っ子]
 のように、ヒトをとる「憎い」のような語も見られる。ヒトは広く考えればモノの範疇に入り、その意味ではこの「憎い」などは、コト・モノ両用という可能性を持っている。また、次のように、後ろに「思う」をともなって、ヲをとる例も散見する。

○ 方哉さんのお母さまは、それで、あたしを今以て、憎いとっていらいっしやるんだわ[船橋聖一・雪夫人絵図]

こうした例の場合は、純粹にコトだけしかとらない語に比べると、やや評価的性格を持つように感じられる。つまり、「感情形容詞」の中でもその対象内容のありようによってそのニュアンスも変化することが考えられる。

＊

以上の「感情形容詞」に対して、次のような語群を「属性形容詞」と呼ぶ。

◇「わたし」の心の様子を表さず、主語にモノをとるもの…属性形容詞
 :単:ア^アイ(青イ), ア^アイ(赤イ), ア^アカ^カイ(明カイ), ア^アシ^シイ(浅イ), ア^アツ^ツイ(厚イ・篤イ), ア^アヒ^ヒイ(荒イ), ア^アワ^ワイ(淡イ), ウ^ウシ^シイ(薄イ), オ^オホ^ホイ(大キイ), オ^オモ^モイ(重イ), カ^カイ(硬イ・堅イ・固イ), カ^カシ^シイ(軽イ), カ^カイ^イ(可愛イ・小サイ、ノ意), キ^キヤ^ヤイ(汚イ), キ^キヨ^ヨイ(清イ), ク^クライ(暗イ), ク^クロ^ロイ(黒イ), コ^コイ(濃イ), コ^コホ^ホイ(細カイ), コ^コワ^ワイ, シ^シロ^ロイ(白イ), セ^セマ^マイ(狭イ), タ^タカ^カイ(高イ), チ^チサ^サイ(小サイ), チ^チカ^カイ(近イ), ツ^ツヨ^ヨイ(強イ), ト^トホ^ホイ(遠イ), ナ^ナガ^ガイ(長イ・永イ)

、ヒクイ(低い)、ヒロイ(広い)、フカイ(深い)、フタイ(太い)、ホイ(細い)、マホイ(眩い)、ミジカイ(短い)、ムサイ、モイ(脆い)、ヤスイ(安い)、ヤラクイ(柔らかい)、ヤラクイ(軟かい)、ヨイ(弱い)、ワカイ(若い)、ウツクイ(美しい)、クツクツイ、クワシイ(険しい)、クワシイ(親しい)、トホシイ(乏しい)、ヒトシイ(等しい)、ヤシイ(優しい)
 :派:アツホウタイ(厚ホウタイ)、アブラッコイ(油っこい)、イカツイ(厳しい)、イロホウイ(色ホウい)、ワリホウイ(怒りホウい)、モトイ(重たい)、キロイ(黄色い)、クロホウイ(黒ホウい)、シカクイ(四角い)、シメホウイ(湿ホウい)、シロホウイ(白ホウい)、セシシイ(忙ししい)、デカイ・デッカイ、ネイ(粘い)、ヒライ(平たい)、ホロイ、マルイ(丸い)、ミクイ(醜い)、キタラシイ(汚らしい)、カハカハシイ(磊磊しい)、コゴウシイ(神神しい)、ビビシイ(美美しい)、フルカシイ(古かしい)、ミホラシイ、ミズミズシイ(瑞瑞しい)
 :複:アサホロイ(青黒い)、アホシロイ(青白い)、アカホロイ(赤黒い)、アサホロイ(浅黒い)、ウスアカイ(薄赤い)、ウスギタイ(薄ぎたい)、ウスグライ(薄暗い)、ウスカクイ(堆い)、ウラワカイ(うら若い)、カホシイ(か細い)、カンカクイ(甲高い)、ガンベナイ(頑是無い)、クサフカイ(草深い)、クサフカイ(気高い)、ケフカイ(毛深い)、コタカイ(小高い)、タタギホロイ(徒広い)、トスクロイ(トス黒い)、ハチシイ(果無し無い)、ヒョロナカイ(ヒョロ長い)、フアタイ(分厚い)、ホナカイ(細長い)、ホクグライ(仄暗い)、マクロイ(真黒い)、アイルシイ(愛かししい)、カフシイ(芳しい)、カンハシイ(芳しい)→カフシイ、コハシイ(香ハシイ)、マツラシイ(真新しい)

上の語例からもわかるように、モノを主語としてとる「属性形容詞」は、その事物の性質やありさまを述べている。その意味で、モノの属性をそのまま記述する性格が強いと言える。派生形の「～ばい、～こい、～しい」にはやや評価的なニュアンスが感じられるが、単純形では、色彩や人間関係その他一部の語をのぞいてほとんどが対義語のペアを持ち、評価的性格は低い。

＊

以上のように、「感情形容詞」と「属性形容詞」は、「わたし」の心の状態を表す場合と、事物の状態を表す場合とに二分され、その両極の典型を示す語群であることがわかるが、ここで重要なことは、どちらの場合も、その話し手の主観的な認識が作用しているのではないかということである。なぜなら、「感情形容詞」は、あくまでも「わたし」の状態を表しているのであって、それがそのまま主観的な語であるとはいいがたい。「属性形容詞」も、認識の対象としての事物の状態を表しているの、一見客観的な表現のように見えるが、これも、そのように判断する話し手の主観によるところが大きいのではないか。ただし、「感情形容詞」が第三者の目には見えない「わたし」の状態であるのに対し、「属性形容詞」はその状態の確認を他者と共有できる点で異なる。ゆえに、一般には、「属性形容詞」の方が客観的であると考えられやすいのではないか。言い換えれば、形容詞の場合、その事物・事柄をどのように認識するかという話し手の主観によらざるを得ないのではないかということになる。

2-4 評価性形容詞の問題

ここでは、対象語にモノ・コトをとる場合と、主語にコトおよびモノ・コトをとる場合を一括して「評価性形容詞」と呼ぶ。

◇「わたし」の心の様子を表し、対象語にモノ・コトをとるもの…評価性形容詞

：単：ウツシイ(煩い)、モシロイ(面白い)、カワイ(可愛く愛シイ意)、コワイ(恐い・怖い)、ヨイ・イイ(好い)、イトシ、ウツシ(惜しい)、コイシ(恋しい)

：派：メントウクシイ(面倒臭い)、イタマシ(痛ましい)、イタワシ(労しい)、イトシ、イブ・カシ(訝しい)、イイマシ(忌々しい)、イワシ(忌まわしい)、ウカウシ(疑わしい)、ウツロシ(鬱陶しい)、ウラメシ(恨ましい)、ウツヤマシ(羨ましい)、ウロシイ(恐ろしい)、キツ・カワシ(氣遣わしい)、シワシ(慕わしい)、セワシ(忙しい)、タノシ(頼もしい)、ナツ・カシ(嘆かしい)、ナツカシ(懐かしい)、ニクラシ(憎らしい)、ネマシ(妬ましい)、ワス・ラワシ(煩わしい)：複：アジキイ(味気無い)、アジキイ(味気無い)、ウスミワシ(薄気味悪い)、モロイ(面映い)、コロヅ・ヨイ(心強い)、コロモトナシ(心許無い)、ナツカシ(情ない)、ハツ・ユイ(歯痒い)、フガ・イイ(臍甲斐無い)、スエロシ(末恐ろしい)、ソエロシ(空恐ろしい)、ホラシ(誇らしい)、モガ・ナシ(物悲しい)

◇「わたし」の心の様子を表さず、主語にコトをとるもの…評価性形容詞

：単：ムツカシ・ムス・カシ(難)、ヤシシ(易しい)

：派：アツカ・マシ(当ツク)、アツカ・シ(慌々しい)、イカシ(厳しい)、イタシ(痛々しい)、ウツロシ(疎疎しい)、ウツヤシ(恭しい)、ウカ・マシ(痴かましい)、モロシ(重々しい)、モロシ(思わしい)、カガ・イイ(甲斐甲斐しい)、カガ・ヤカシ(輝かしい)、カガ・ルシ(軽々しい)、クツ・クツ・シ、クツ・クツ・シ、シツメラシ、シラジ・ラシ(白々しい)、ソラジ・ラシ(空空しい)、クツ・クツ・シ、トク・トク・シ(刺刺しい)、ナツ・ラシ(長々しい)、ナマナシ(生々しい)、ナマカシ(艶かしい)、ナマ・クマシ(涙ぐましい)、ニアシ(似合わしい)、ニガ・ニガ・シ(苦々しい)、ニギ・ニギ・シ(賑賑しい)、ニクニクシ(憎々しい)、ノ・マシ(望ましい)、ハナハ・シ(甚だしい)、ハナ・ナシ(華々しい)、ルカ・マシ(晴れかましい)、ホエマシ(微笑ましい)、ムゴ・ラシ(惨々しい)、メ・マシ(目覚ましい)、モトモシイ(尤らしい)、ユシ(由由しい)、ヨコハ・シ(喜ばしい)

◇「わたし」の心の様子を表さず、主語にモノ・コトをとるもの…評価性形容詞

：単：アブ・ナシ(危ない)、アヤシ(危い)、ウイ(疎い)、ウマイ(巧い・上手い)、エシ(降い)、オシ(多い)、オサシ(幼い)、オシ(遅い)、カコシ(賢い)、カシ・ナシ、ク・イ、コシ(狡い)、サシ(聡い)、シツコシ、シツ・ト、シイ(吝い)、スナシ(少ない)、ス・イ(凄い)、ス・イ(鋭い)、ス・ルシ(狡い)、タツシ(尊い)、ツナシ(拙い)、トク・イ(貴い)、ナシ(無い)、コ・イ(鈍い)、ロシ(鈍い)、ハシ(早い・速い)、ヒ・イ(酷い)、フルシ(古い)、ム・イ(惨い)、ヨ・イ(善い・良い)、ワシ(悪い)、アツシ(新しい)、アツシ(怪しい)、ヤシシ(卑しい)、カシ(変々)、オ・ヒ・カ・シ(夥しい)、カシ(姦しい)、セ・シ(厳しい)、クシ(詳しい)、サシ、ス・ラシ(素晴らしい)、ク

・シイ(正シイ), ママシイ(約シイ), ハゲ・シイ(激シイ), ヒサシイ(久シイ), マス・シイ(貧シイ), ヤママシイ(喧シイ), ヤマコシイ

: 派: アキッホ・イ(飽キッホ・イ), アクト・イ(悪ト・イ), アラホ・イ(荒ホ・イ), インキサイ(陰気臭イ), ウンクサイ(胡散臭イ), イカ・タイ(得難イ), キヤシイ(氣安イ), ケチハ・ツタイ(口幅ツタイ), ケチサイ, コロヤシイ(心安イ), シキサイ(心気臭イ), セチ・ライ(世知辛イ), トロイ, ハソイ, フルサイ(古サイ), メ・タイ(目出度), モックタイ(勿体無イ), ヤスホ・イ(安ホ・イ), ワスレホ・イ(忘レホ・イ), アイサイ(愛サイ), アヤマシ(浅マシイ), アツカマシイ(厚カマシイ), アラアサイ(荒々シイ), イカ・ワシイ(如何ワシイ), イヤマシ(勇マシイ), イカ・シイ(忙シイ), イヤシ(嫌サイ), ウイウイ(初々シイ), ウルシイ(麗シイ), オオシ(雄々シイ), オツカ・マシイ(押シ付ケ), ホコラシイ(男サイ), ホトシイ(大人シイ), オンナシイ(女サイ), カイライシ(可愛サイ), キ・ヨウキ・ヨウシイ(仰々シイ), カ・ラサイ(汚ラサイ), コマシイ(好マシイ), コホシイ(好モシイ), サカ・シイ(騒カ・シイ), シラシイ, スカ・スカ・シイ(清清シイ), スマシイ(凄シイ), ス・ウス・ウシ(図図シイ), ソウ・ウシ(騒々シイ), ソツカシイ, タクマシイ(逞シイ), タタ・クシイ(猛々シイ), チカシ(近シイ), ツマシイ(慎シイ), ト・クト・クシ(毒々シイ), ナレナシイ(慣レ慣レシイ), ニカラシイ(憎カラシイ), ニツカシイ(似ツカシイ), ノワシイ(呪ワシイ), フサワシイ(相応シイ), フヅ・フシイ, マキ・ラサイ(紛ワサイ), ムツマシイ(睦マシイ), マス・ラシイ(珍シイ), メ・シイ, メシイ(女々シイ), モモノシイ(物々シイ), ヨヨシシイ(余所余所シイ), ヨシ(宜シイ), ヨヨシシイ(弱々シイ), リシイ(凜凜シイ), レイレイ(麗麗シイ), ワカサシイ(若々シイ)

: 復: アッケナイ(呆氣ナシ), ア・クナイ, イキ・ヨイ(潔イ), イジ・クナイ(意地汚イ), イトクナイ(幼イ・稚ナシ), インショウ・カイ(印象深イ), イ・ツナイ, イント・オイ(縁遠イ), エンショウ・カイ(遠慮深イ), オク・カイ(奥深イ), オ・メ・タイ, カ・リナイ(限リナシ), カハラタイ(片腹痛イ), カヨイ(カ弱イ), キクサイ(キ臭イ), キミルイ(気味悪イ), キ・ゴ・クナイ, キ・リカ・タイ(義理堅イ), クナルイ(口煩イ), クチ・クナイ(口汚イ), クチカ・ナイ(口サ・ナイ), コロコイ(心難イ), シカ・ナイ→サカ・ナイ, シト・クナイ, シン・ウツ・ヨイ(辛抱強イ), ショ・サイナシ(如才無イ), ス・クナイ, ス・シヨイ, ス・ヤイ(素早イ), ス・ブ・トイ(図太イ), タヤシ(容易イ), タリナイ(頼リ無イ), チカラ・ヨイ(力強イ), チマク・サイ(血生臭イ), チュウイ・カイ(注意深イ), ツツミフ・カイ(慎ミ深イ), ツミ・カイ(罪深イ), ヲロコイ(面憎イ), テアツイ(手厚イ), テアライ(手荒イ), テイタイ(手痛イ), テカ・タイ(手堅イ), テゴ・ワイ(手強イ), テトリハ・ヤイ(手取り早イ), テヌルイ(手温イ), テハ・ヤイ(手早イ), テ・ロイ(手広イ), ト・エライ(ト・偉イ), ト・キ・ツイ, ナカ・カイ(情カ深イ), ナ・カイ(名高イ), ナミ・モロイ(涙脆イ), ネ・ヨイ(根強イ), ネ・リツ・ヨイ(粘リ強イ), ネ・カイ(根深イ), ノリオ・イ(残り多イ), ハカイ(果敢イ・夢イ), ハラク・ロイ(腹黒イ), ヒトナツコイ(人懐ッコイ), ヒヨイ(ヒ弱イ), ホ・ヨイ(程良イ), マチ・イ(間違イ無イ), マチ・カイ(間違イ), マリクト・イ(回リク・トイ), ミス・クサイ(水臭イ), ミヨイ(見好イ), メ・トイ(目聡イ), モノスコイ(物凄イ), モミ・カイ(物見高イ), ヨウ・ンブ・カイ(用心深イ), ヨキ・ナイ(余儀無イ), ヨト・ゴロイ(抛無イ), ワカ・シヨイ(悪賢イ), イジ・ルイ(著シイ), オコカシイ(奥コカシイ), オク・ルイ(重苦シイ), カク・ルイ(堅苦シイ), キム・カシイ(氣難シイ), クチカマシイ(口喧シイ), コ・カシイ(小賢シイ), コ・アラサイ(事新シイ), コ・クサイ(小憎ラシイ), コ・ニカラシイ(小憎ラシイ), ヒ・コマシイ, テ・キ・シイ(手敵シイ), マ・ヤシイ(生易シイ), ミ・ルシイ(見苦シイ), ミ・マ・ラシイ(耳新シイ), ミ・ク・ルシイ(耳苦シイ), マ・タラシイ(目新シイ), マ・ク・ルシイ(目マ・ルシイ), モ・メ・ラシイ(物珍

シイ)

対象語にモノ・コトをとる語群は、心情を表すという点では、コトをとる感情形容詞と類似するが、モノ・コトの場合は、話し手自身の心の状態というよりは、事物・事柄に対する評価の性格が強いことが指摘できよう。具体的には、事物・事柄に対してその人(話し手)がどう思うかというニュアンスを記述する語として機能している。そのため、この語群では、人に関して評価的に用いられるケースが多い。また、その他の類に比べて、派生・複合の比率が高く(表1参照)、とくに派生形の語尾が「～シイ」となる語がきわめて多いのも、この「評価性形容詞」の特徴である。

この「評価性形容詞」の場合、基本的にはコト・モノ両用の主語・対象語を取り、その範囲はいろいろであるが、それぞれの語によってそのありようはさまざまである。

たとえば、「あやしい」「おかしい」では

- 外見こそ屋根瓦に低くおさえられているが、なかにはいれば、どの部屋も、天井が高く、なぎなたが振りまわせそうだったのがあやしい。[島尾敏雄・死の棘]
- 悦子さん、親爺があんなことを言い出すのはおかしいぜ。[三島由紀夫・愛の渇き]

のようにコトを受ける場合が多いが、「おもしろい」「かわいい」などではヒトを対象語とすることが多い。

- 健ちゃんがあんまり可愛いから、ママがパクって食べちゃったのよ。
[向田邦子・思い出トラップ]

これに対して、「やかましい」はほとんどモノを対象とする。

- もうそのころは戦争で防空壕とか疎開とか町内でもお互に話が喧しくなっていましたので[井伏鱒二・駅前旅館]

また、「にくらしい」のように、コト・ヒトのほかにモノをとるものもある。

- 女中と同じに呼ぶのが憎らしくてたまらない。[円地文子・女坂]
- 面白くもない学生生活をどうしても卒業させようという彼や彼の父が憎らしくてならなかった。[瀬戸内晴美・いずこより]
- ひさしぶりにあらわれて、暴力をふるうにひとしく、それで一切がかたづいたつもりになっている男の心がにくらしかった。[丹羽文雄・献身]

このように、「評価性形容詞」には、「わたし」の心の状態を表すものと表さないものとがいわば同居しており、さらにその対象内容もコト・モノ・ヒトを広

く受けている。すなわち、他の類ではかなり厳格に守られている制限がこの「評価性形容詞」ではきわめてルーズになり、その上で、事物・事柄に対する話し手の評価的ニュアンスがさまざまにこめられている。

しかも、調査指標①として立てた「わたしは～い。」の形で「わたし」の心の状態を表現しているのかどうかという基準そのものがここではやや揺らいでくるようにも思われる。

たとえば、西尾(1972)では、「わらい」について「わたしは、ほこらしい。」という文は成立せず、「わたしは、ほこらしい気持ちだ」とあるべきだとしたのに対し、細川(1989)では、「わたしは、ほこらしい。」を文として成り立つと考えた。つまり、基本的な判断そのものが観察者によって揺れているということになる。それは、その対象内容は主語なのか対象語なのか迷うケースの多いこともとも関連があらう。

○ 教師と対等に言い争いの出来る友達のいることが素に対して誇らしかった。[三浦哲郎・春の道標]

○ 私は西洋の王子さまのように凛々しくハイカラに見える兄がまぶしくて誇らしく、兄の後ばかりについて歩いていた。[瀬戸内晴美・遠い声]

このように、「わたし」の状態と事物・事柄の状態の両方にまたがるものが従来の形容詞分類のむずかしさであり、同時に「評価性形容詞」の特徴の一つだと本稿では考えるのである。

2-5 形容詞分類案のまとめ

以上のように、形容詞分類を考える場合、基本的には「わたしは～い。」の形で、「わたし」の心の様子を表すことが可能かどうか(調査指標①)が重要な決め手になることがわかる。さらに、その上で、対象内容にどのような性格のものがくるか(調査指標②)が分類の基準として有効であることも確認できる。

ここから、表1におけるAグループは、あくまでも「わたし」の状態を表しているのであって、Aのみが主観的な形容詞であるとは言えない。Bグループも、認識の対象としての事物や事柄の状態を表しているの、これも話し手の主観によるところが大きい。ただし、Aが第三者の目には見えない「わたし」の状態であるのに対し、Bはその状態の確認を他者と共有できる点で異なるからである。ゆえに、一般には、Bが客観的であると考えられやすいということになる。

また、対象内容からみると、「感覚形容詞」2種・「感情形容詞」・「属性形容詞」の4種3類は、そこにかかなり明確な限定のあることがわかる。典型的なものは、「感情形容詞」と「属性形容詞」であるが、この両者の違いは、従来から

言われる主観・客観という別ではなく、「わたし」の状態か事物・事柄の状態かという視点およびその対象内容の差異による違いとして記述できることが明らかとなった。

問題は、その中間的な存在としての「評価性形容詞」をどのように考えるかということであるが、結局は、ここに「わたし」の状態を表す場合とそうでない場合との明確な一線を画するのは困難であるというのが本稿の立場である。つまり、この部分において両者は連続的に重なりあっているというように判断すべきだと考えるからである。「評価性形容詞」において、モノ・コトにわたって対象内容が広がっているのも、また、それらを補うように、派生・複合の形が多く用いられているのも、対象語と主語の認定がきわめて紛らわしくなるのも、すべてそうした中間の性格によるものであると考えられる。もちろん、この類の性格をより明確に規定していくことが今後の形容詞分類の重要な課題の一つである。

いずれにしても、従来漠然と定義されていたこれら形容詞が、大きく感覚・感情主の状態を表す場合と事物・事柄の状態を表す場合とに分けられ、その内部が対象語および主語のあり方によってさまざまに構成されていることを本稿によって具体的に明らかにすることができたと思う⁽³⁾。

3. 形容詞の主観性をどう位置づけるか

本稿では、状態表現（サマ）としての形容詞を、客体的表現の中の主観的な表現として位置づけることを試みた。すなわち、状態表現全体が、話し手の主観に根ざした主観的表現とするわけである。

このことをもう少し広げて考えてみると、モノ・コト・サマの諸概念のうち、たとえば「机」「椅子」などの事物表現はモノとして規定できるが、「走る」・「歩く」というようなコトは事柄と動作の二つの表現にまたがっており、本稿で扱ったサマの場合も、事柄と状態の両方の表現になり得る。ただ、コト（動作表現）とサマ（状態表現）は必ずその動作・状態の主体・対象内容（主語・対象語）を必要とする点でモノと異なっていると言えよう。その上で、動作を表す客観的な表現としての「ある」・「いる」や、アスペクトによる「～ている」等と軒を接しつつ、形容詞全体が主観的表現として位置づけられるのは、本文中でも指摘したように、単独では成立し得ないサマ（状態表現）としての性格によるものであると考える。この点については、さらに今後の検討の課題としたい。

最後に、本稿で示した形容詞分類と主観性との関係を文構成全体の中で位置づけたものを簡単な図で示しておく。

<言表事態>		客体的		<言表態度>	
モノ (事物 表現)	サマ (状態表現)	「わたし」 の状態	感覚形容詞 1 感情形容詞	主観的	主体的 モダリティ 仁田(1989) 参照
コト (事柄 表現)		----- コトの状態 モノ・コトの状態 モノの状態	評価性形容詞 感覚形容詞 2 属性形容詞		
サマ (事柄 表現)	コト (動作表現)			客観的	
		寺村(1982)参照			

注(1) 「わたしは悲しい」とは言えても「かれは悲しい」とは言えないのは、いわゆる言い切りの場合に限られる。話し手の態度としてのタ・ノダ・ダロウなどの言表要素が後接すると、この制限は解除される。

(2) 分析対象とした語彙は、次に挙げた6種の文献中、2種以上のものに採録されている形容詞語彙515語のうちの501語である。細川(1989)参照。

①国立国語研究所『分類語彙表』秀英出版 昭和39年(1964)／②西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所 昭和47年(1972)／③時枝誠記『例解国語辞典』中教出版 昭和31年(1956)／④文化庁『外国人のための基本語用例辞典(第二版)』大蔵省印刷局 昭和50年(1975)／⑤国際交流基金『日本語初歩』凡人社 昭和56年(1981)／⑥甲斐睦朗「小学校国語教科書の学習語彙表とその指導」光村図書 昭和57年(1982)

(3) 本稿では、細川(1989)同様、それぞれの語義を基礎的な場合に限って考察した。「冷たい素振り」や「渋いネクタイ」等の比喩的な用法は、むしろ本稿で述べた枠組みを超えて使用されるために生じる現象であると解釈したい。もちろん、そのような語の多義性や比喩性の問題は、今後の重要な課題として取り組むべきテーマの一つであると認識している。

〔引用文献〕（著者五十音順）

- *北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店
- *国広哲弥(1981)『日英語比較講座 3 意味と語彙』大修館書店
- *寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- *時枝誠記(1950)『古典解釈のための日本文法』至文堂
- *西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- *仁田義雄(1989)「現代日本語文のモダリティの体系と構造」（『日本語のモダリティ』くろしお出版）
- *森田良行(1968)「動作・状態を表すいい方」（『講座日本語教育』4）
- * — (1983)「日本語の形容詞について」（『講座日本語教育』19）
- *山口仲美()「感覚・感情語彙の歴史」（『講座日本語学4 語彙史』）
- *山口佳紀(1985)『古代日本語の文法の成立の研究』明治書院
- *細川英雄(1985)「現代日本語の温度形容詞について」（『信州大学教育学部紀要』56）
- * — (1986)「風は寒いか冷たいかー温度形容詞の用法について」（『国語学研究と資料』10）
- * — (1987)「寒冷感覚の認識と表現」（『北陸古典研究』2）
- * — (1988)「現代日本語形容詞語彙一覧稿」（『金沢大学教養部論集 人文科学篇』24-2）
- * — (1989)「現代日本語の形容詞分類について」（『国語学』158）
- * — (1990)「感情形容詞の連用修飾用法について」（『近代語研究』8）
- * — (1992)「感情形容詞研究の一視点ー万葉集に見える「かなし」の意味分析からー」（『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』）

◇本稿は、研究発表「主観的な表現と客観的な表現ー形容詞の主観性についてー」（早稲田大学国語学会 1991・1・12）での草稿に基づいている。関係の方々からの貴重なお教示に厚く御礼申し上げます。